

# あんげろす

量より質

手塚奈々子

聖書の「ぶどう園の労働者の譬え(マタ 20:1-16)」と「放蕩息子の譬え(長男の場合/ルカ 15:25-32)」では、「量より質」の生き方が勧められていると思う。何時間働いたからより良いとかメリットありということではなく、「共にいる」ことが肝心だと言われていると思う。何ができるかとか生産性や労働能力があるかとかではなく、「イエスの国」では「一緒にいることに幸せを感じるか」が問われていると思う。「世」の量計算での生き方と違い、「イエスの国」では人間としての質の高さが求められると思う。「神の像と似姿」に従って造られた私達の質の高さを思い、質高く生きたいものである。



てづか・ななこ(所員)

第81号

2020年3月

デンマークの近代思想を形作ってきた思想家として著名な神学者に N. F. S. グルントヴィがいる。グルントヴィは、近代日本における農学校や農民高等学校のモデルとなった国民高等学校(Folkehøjskole)の理想的創設者でもある。一昨年2018年8月にグルントヴィの思想の世界的な影響に関する研究会がロンドン大学(University College of London)で開催され日本から参加した。この会議の準備をされていて分かったのは、本学には近代日本とデンマークに関する資料が思いがけずたくさん保存されていること、農業、教育、そしてキリスト教の三点において、近代日本が北欧の小国デンマークから多くを学んでいたことである。

1873年4月、岩倉使節団が農業の近代化を学ぶためにコペンハーゲンを訪問している。その3年後には札幌農学校が、5年後には駒場農学校がそれぞれ開校するが、このとき両校に集った農学者たちも相次いでデンマークを訪れている。1898年から1904年には、東京帝大社会学講師だった建部遯吾が訪欧し、このとき建部が入手した情報を基に東京帝大農科大学助教授の矢作栄蔵が『中央農事報』に「農業経済論」(1901)を著し、「丁抹は、往年独逸との戦争に敗れて大に其領土を失ひたるに拘はらず、今や人口は急殖して昔日に倍し、都鄙を通じて国民一般に幸福にして、全国の富に進みたりという」と解説している(宇野豪, 1991, 『近代日本における国民高等学校運動の生成過程(上)』広島修道大学総合研究所, pp. 4-5.)。1904年には佐藤寛次が「丁抹の復興」を『農業雑誌』に訳出し、グルントヴィが創設した国民高等学校が日本語ではじめて紹介される(佐々木正治, 1999, 『デンマーク国民大学成立史の研究』風間書房, p. 2.)。1908年には、矢作が5年間のヨーロッパ留学の成果として『産業組合』に「農業振興策と丁抹国の実例上下」という論文を投稿する(宇野豪, 1991, 『近代日本における国民高等学校運動の生成過程(上)』広島修道大学総合研究所, pp. 6.)。ここでは第一にデンマークがイギリスのような良好な市場を持っている

こと、第二に農政改革が中小規模農家を保護したこと、そして第三にグルントヴィの尽力により「丁抹の国情に適したる特種国民補習学校」が制定されていることの三点が強調されている。このように、明治初期の農学者たちはデンマークの農業政策を理解しようと調査を重ねていた。

同時に、農学者たちは農村における教育のあり方にも強い関心を寄せている。1909年にヨーロッパを再訪した建部はノルウェーとデンマークの「庶民高等学校」を訪問する。1912年、『産業組合』に協同組合について報告した針塚長太郎も、「丁抹国の産業組合が普及し且つ活動するに至った原因は…主として同国の高等国民学校の力に依ると云うを憚らぬ」と記している(宇野豪, 2003, 『国民高等学校運動の研究』溪水社, pp. 28.)。その後も、1913年に那須皓が A. H. ホルマン『国民高等学校と農民文明』(A. H. Holmann, *Volkshochschule und die Grundlagen der Demokratie*, 1909)を訳出すると、デンマークの近代農業が、農閑期に寄宿制の成人教育機関として機能する「学校」によって支えられていることが知られるようになる。

その後、日本にも「学校」が移入される。しかし日本におけるデンマーク由来の「学校」は二つの道をたどる。ひとつは、農村伝道を通じて貧しい土地に豊かさをもたらそうとした民間のキリスト者たちの試みである。内務省官吏だった藤井武は、1915年、ホルマンの著書を基に構想した「山形県自治講習所」を開設したもののすぐに辞職し、内村鑑三の助手として伝道生活を送った。1925年にデンマークを訪問した賀川豊彦も、帰国後、杉山元治郎「農民福音学校」を兵庫県瓦木村にあった賀川の当時の自宅に設立している。平林廣人を初代校長に迎え札幌農学校出身の渡瀬寅次郎の遺志により静岡県沼津市久連に設立された「興農学園」も、デンマークの国民高等学校をモデルとしている(野村武夫, 2018, 「YMCA 農村青年塾の源流と成立過程」『YMCA 史学会』会報 No. 72, p. 1-15.)。もうひとつは、のちの満州国の占領政策を準備する官製の農業訓練所である。藤井が開設した山形県自治講習所の所長として赴任した加藤完治は、熱心なキリスト者から古神道に転向した人物で、「北欧の弱

小国デンマークがイギリスに破られ、ドイツに屠られ、今まさに亡国の悲運に陥ろうとする時、偉人グルントヴィーがとった道は、結局農村青年に理想信仰を植え付ける事にあつたのである。僕らはこれを深く味わわねばならぬ」と記し、「大和魂の磨き合いをする学校」を目指した（加藤完治全集刊行会編、1977、『加藤先生 人・思想・信仰（下巻）』、日本高等国民学校、p. 279.）。

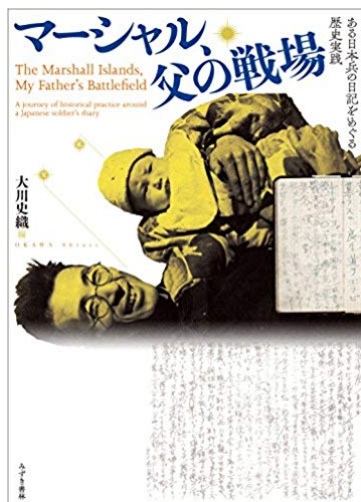
グルントヴィーの理念を継承する国民高等学校はこのように、農村恐慌期にあつた1920年代の日本にあつては、近代工業発展の裏に信仰する農村の衰微に悩む農本主義者たちにとって、ある種の希望に見えたことが推察される（碓井正久、1993、『社会教育の教育学』国土社 pp. 126-151）。一世紀が経過した現在、農業、教育、そしてキリスト教は日欧においてどのような変化を遂げたのか。グルントヴィーが残した著作群を再読し、今後も引き続き考えたい。

さかぐち・みどり（所員）



N. F. S. グルントヴィー

大川史織編  
『マーシャル、父の戦場  
ある日本兵の日記をめぐる  
歴史実践』  
（みずき書林、2018年）



## 餓死した兵士が遺した言葉の力

田中 祐介

誰かが綴った日記を読み解くことは、その人の人生を追体験し、喜怒哀楽に耳を傾けることでもある。仮にそれが故人の日記であれば、紐解くことで生者は死者に出会い、死者の生命と感情は鮮やかに蘇る。再び息づいた死者の言葉は、生者である私達をどう感化し、行動を促し、新たな出会いへと繋げる力をもつであろうか。

そんなことをこの2年ほどよく考えた。きっかけは、太平洋戦争末期のマーシャルで餓死した日本兵の日記に出会ったことである。大川史織編『マーシャル、父の戦場 ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林、2018）は、マーシャル諸島のウォッチェ島で、死の直前まで日記を綴った佐藤富五郎氏の日記を全文収録する。食糧事情の悪化とともに富五郎氏の身体にも変調が現れ、1945年4月26日に命を落とした。死の前日の日記には、「全ク働ケズ苦シム 日記書ケナイ 之ガ遺書 昭和二十年四月 二十五日 最後カナ」と記された。富五郎氏の強い希望により、日記は同じ戦場の友人である原田豊秋氏に託され、敗戦後、奇跡的に富五郎氏の家族へと渡った。

富五郎氏のご子息である佐藤勉さんは、日記を大切に保管し、かねてから日本遺族会の慰霊事業によりウォッチェ環礁を訪れていたが、毎回の滞在時間はごく限られた。上掲書の編者である大川史織さんの監督映画『タリナイ』には、勉さんがウォッチェ島にはじめて1週間滞在し、父の慰霊式を催す様子が収められる。作中の「お父さん、来ましたよ、勉です」という息子の叫びは、父の日記の「勉クンドウシタカナー」という言葉と呼応し、相互の思慕は時空を超えて共鳴する。遺された日記の言

葉を介してこそ、このような形での父子の「再会」が実現したと言える。

日記の言葉は、父子の「再会」をもたらすのみならず、ゆかりのない他者にも影響を及ぼす。遙か遠方で命を落とした1人の兵士の生きた証は、戦後75年にあたる今日でも、人々に戦争の実相を伝え、新たな認識と行動を促す力をもつ。筆者は2018年度、19年度と、本学(明治学院大学)の担当授業で富五郎日記の読み解きを取り入れたが、社会科教員を目指す受講生からは「戦争の授業の際にこの日記を取り扱えば、教科書よりも戦争とはどういうものかを理解することができると思う」、また別の受講生からは「この日記を自分の周りの人に話し、議論することで読ませて頂いた責任を果たそうと思う」との感想が寄せられた。戦後日本の戦争経験の語り「記憶の時代」の限界期に達しようとする今日、日記読解を通じて未知の他者の生と死に寄り添うことは、「記憶の時代」の先に想像力を働かせて戦争経験を継承するという、困難な道を実現する一つの可能性を示唆している。上掲の書籍と映画では、日本兵が現地住民に加えた危害と、労働力確保のために連行された朝鮮人についても触れられる。日記の読み解きによる戦場の生の追体験とあわせ、加害と被害の両面をもつ戦争経験を複眼的に継承する手がかりにすることもできよう。

日記に感化を受けた著者にも、授業実践以外にもささやかながら新たな行動が生まれ、貴重な出会いがあった。大川史織さんには映画のゲストトークにお招きいただいた。筆者の主催シンポジウム「近代日本を生きた『人々』の日記に向き合い、未来へ継承する」(2019年9月28日、29日)では、富五郎日記の読み解きを筆者が担ったほか、大川さんの映画上映と講演会を実現で

きた。目下はシンポジウムに基づく研究書を制作中である。書籍と映画に携わった方々との出会いも嬉しく、佐藤勉さんとは楽しい酒席をご一緒し、お住まいのある宮城県亶理町での映画上映にも微力ながら協力することができた。

日記を介しためぐりあわせは予想外のところにもあった。勉さんから聞いて驚いたことに、本学名誉教授であり、キリスト教研究所の協力研究員でもある勝俣誠先生は、なんと勉さんのご親戚であった。そのことを勝俣先生に伺ったところ、ご高著『娘と話す 世界の貧困と格差ってなに?』(現代企画室、2016)をお贈りくださった。同書の「あとがき」には、確かに佐藤富五郎・勉親子と、日記の存在について触れられている。故人の言葉を縁とする人の繋がりはこのような形でも現れるのだと、しみじみ感じた次第である。

たなか・ゆうすけ(所員)

## 雑録

篠崎 美生子

このたびの新型コロナウイルスの流行は、わがキリスト教研究所にも多大な影響を及ぼし、3月14日に予定されていた研究会をはじめ、各プロジェクトの公開研究会等、3月中のイベント全てを中止にせざるをえなくなった。その日のために準備を重ねてこられた方々とともに、無念の思いをわちあいたい。そして、いつかさらなるよい機会が巡ってくることを祈りたい。

それにしても、政府の対応を初めとして、日本のさまざまな決定機関の対応の鈍さが、今回もあらわになった。中国武漢におけるこの病気の流行が報道され始めた時、武漢市が「封鎖」された時、この病気の存在について警鐘を鳴らそうとした武漢の医師が、そのことを抑圧された挙句に感染によって亡くなったことが分かった時、どれほど日本

のマスコミは「中国」を批判したことだろう。しかし、「日本」の対応が、「中国」より勝っていたと果たして言えるかどうか、私は心もとないと思う。豪華客船内で、あれほど多くの感染者、死者を出してしまったことが象徴的である。

そして今、いどこで感染してもおかしくないという状況下で、日本の組織が私たちに要請するのは、外出、集会の自粛と、うがい、手洗いのみなのだ。聞くところによると、上海の地下鉄は時間を決めて消毒がなされており、韓国では感染隔離者の一家に手当てが支給されているという。しかし日本では、見えない敵から自分で自分の身を守らなくてはならない。品薄になってから何週間もたつマスクは、ネット上で、20枚が数千円から数万円で販売されている。まるで戦後の闇市だ。政府やマスコミはそれを批判する前に「健康な人にはマスクはいらない」と言っただけ。ウイルスの着いた手で、つい、手や鼻をさわってしまわないためにこそマスクはあると、1年前には報道していたはずなのだが。

先日、若い同僚と話していた際、「私の好きな言葉は「下剋上」だ」と口にして、おおいに鬻ぎを買った。しかし、こういう時にこそ、身を切って人の命と健康を守ろうとする政府・組織でなければ何の存在価値があるのだ。そういう政府・組織でない限り、私はそれを批判したい。権力を奪いたいからではない。自分と周囲の人々を守りたいからだ。

不良のクリスチャンながら思う。目の前の人の人権を守りたいという思い、そのためならなんでもしようという思いは、イエスの思いに通じるものではないのかと。歴史あるキリスト教主義の明治学院につながる皆様、いかが思われますか？

しのざき・みおこ（主任）

研究所活動（2019年12月～2020年3月）

明治時代のキリスト教資料研究プロジェクト 内部研究会

「明治初期のクリスチャンの「教養」について

ー中国文化との関わりー」

開催日：2020年2月13日（木）

開催場所：明治学院大学白金校舎

講師：施小煒（し・しょうい、中国 上海杉達学院教授）

アジアキリスト教史研究プロジェクト主催研究会

「香港社会とキリスト教会」

開催日時：2020年2月17日（月）13：30-16：00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館9階 92会議室

講師：陳 継賢（台湾衛理神學研究院 特約研究員）

2019年度第3期 「アジア神学セミナー」

【開講日】 毎週金曜日 18:25～20:25

【開講場所】 明治学院大学白金校舎 81 会議室等

12/6 日本の神学教育の歴史

（神田健次、関西学院大学名誉教授）

12/13 アジアにおけるキリスト教の未来

（徐正敏所長）

新着図書

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2020。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版、2020。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版、2020。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 107、日本基督教団出版局、2019。
- ・『説教黙想 アレタイア』特別増刊号、日本基督教団出版局、2020。
- ・『Japanese Religions』vol. 43 Nos. 1&2、NCC 宗教研究所、2019。
- ・『Exodus 1-18』vol. 1: Chapters 1-10, t&t clark, 2020。
- ・『Exodus 1-18』vol. 2: Chapters 11-18, t&t clark, 2020。



---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第81号

---

2020年3月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩